

# 豊後崩れ

大友宗麟がキリスト教を保護し、教会の建設を許可したことで、豊後府内（現・大分市）は日本における布教の重要な拠点になりました。しかし、豊臣秀吉は宣教師（バテレン）を追放し、キリスト教徒（キリシタン）だった大名に信仰を捨てることを命じたため、府内教会をはじめ、日本各地に築かれた教会の多くが破壊されました。その後政権を握った徳川氏は、さらに厳しくキリシタンを取り締まりました。

## 弾圧への道

ザビエルの豊後來訪をきっかけに、府内には、教会をはじめ西洋式の病院や宣教師養成のための高等教育機関であるコレジオなどが設立されました。1587年（天正14）の宣教師の報告書では、当時「日本国内のキリシタンが20万人前後、そのうち5万人にのぼるキリシタンが豊後にいた」と記されています。しかし、翌年、秀吉が出したバテレン追放令を受け、宗麟の亡き跡を継いだ大友義統は、豊後国内にいる宣教師たちを追放し、キリシタンである家臣や領民に信仰を捨てるように命じました。

江戸時代になると、キリスト教信仰そのものが厳しく弾圧され、キリシタンを見つけ出すために絵踏や密告の奨励が行われました。

## 豊後崩れ

豊後では、24年間（1659-83年）にわたって「豊後崩れ」と呼ばれる大規模なキリシタンの弾圧が行われました。大分市の高田、葛木、丹生から始まった取り締りは、やがて豊後全体に広がり、このときに捕らえられたキリシタンは葛木地区だけでも二百人、豊後全体で千人を超えたとされています。その多くが信仰を捨てるまで牢屋に入れられて拷問を受け、あるいは死罪となりました。また、キリシタンの子孫たちは「類族」と呼ばれ、江戸時代を通じて厳しく監視されました。

丹生で発見された聖母子像や磔刑像などの遺物は、かつて豊後に生きたキリシタンの祈りを今に伝えています。



キリシタン殉教の地の碑（キリシタン殉教記念公園）



丹生で出土したキリシタンの遺物（日本二十六聖人記念館蔵）